

## さと子まなびや 煎茶・お花・和裁

「自分の持っている知識を多くの人に伝えたい」

日本の伝統を伝える「さと子まなびや」は、浅香質店にあります。浅香さと子さんは、煎茶は黄檗東本流教授、和裁は大妻式和裁教授、華道は池坊教授として三つの顔をもち40年近く教えていらつしやいます。

「上人初めて煎茶を作す。」

これ本朝煮茶始めなり」



さと子まなびやの煎茶教室には、浅香さんが横浜や湘南のカルチャーセンターの講師をしていた時の生徒さんが、横浜や大磯から片道2時間かけて通って来ています。瑞光小でもボランティアでお茶の教室を開き伝統を伝えておられます。

煎茶は、江戸時代初期に京都の黄檗寺から発達し、当時最新の中国文化といわれました。煎茶文化は、文人趣味の一つとして文人たちによって発展して、一般に普及していきました。淹茶(玉露)、煎茶、水茶、焙茶、香仙、仙酒、烏龍茶、紅茶や蘭香、ほかにそれぞれ煎法(お手前)を家庭的に学んでいきます。席は、開放的で自由な雰囲気の中で、主客が共に大いに楽しむことを大切に、茶の湯とともに、茶道文化として受け継がれて

きており、日本の日常の喫茶の風習にも大きな影響を及ぼしていて煎茶だけではない文人が好んだ趣味、琴棋書画、文房清玩、そして時には普茶料理や仙酒を楽しむものです。

「着物は日本の民族衣装だから」

日本で和服と呼んでいる物を英語・ドイツ語では Kimono. と呼んでいます。白い割烹着に着物、庶民の普段着として着られていた着物も洋服に押されて成人式・卒業式以外等の行事以外では和服の女性を見かけなくなりました。

東京オリンピック後にはしばらくはウール着物が流行しましたが、和服は難しいというイメージから衰退してきています。しかし、近年は改めて見直されてきて若い人が浴衣に袖を通すようになってきています。

「できませんはないのですよ」

さと子さんは、お義母さんに頼まれて、一晩で羽織を縫い上げたこともあり、好きだからできたとおっしゃっています。が、お義母さんの要望に応えて多くの着物を縫い上げて来ました。

さと子まなびやの和裁教室では、まず肌襦袢を仕上げ、浴衣へと進みます。尺貫法だけでなくメートル法でも教えていますので若い人にもわかりやすくなっています。大妻女子大の和裁科の生徒さんも通って来て指導を受けにくるのは、マンツーマンの個人指導だから。自分のペー

スで縫上げることができません。昭和12年に建てられ、戦災にも焼け残った70年の歴史ある浅香さんの教室にある細かな格子にガラスのはめられた障子、床の間、柱の色・まなびやの名前にふさわしい歴史と伝統を感じさせてくれます。

民生委員も20年されて八面六臂で活躍されている浅香さと子さんは、着物姿が美しい人でした。洋服を着るより、和服の方が早く着ることができから和服で過ごす時間が多いとおっしゃっています。集まってくる生徒さんは、始めた当時からの方もいらつしやいます。

引き戸を引いてお入り下さい。柔らかな会話から自分を見つめ直せる気がする場所、さと子まなびやで忘れかけていた伝統・文化を味わいにいらつしやいませんか。

◇さと子まなびや◇  
南千住1-56-9 (日光街道沿い)  
電話3891-0390  
大妻式和裁教授 浅香さと子  
華道池坊教授 池坊里光園 浅香さと子  
黄檗東本流煎茶教授 浅香鶴邑  
和裁 (金) PM6時~9時  
煎茶 (月曜・土曜) PM1時~8時  
お花 (水曜) PM12時~7時  
入会金1万円・月謝和裁6千円  
・煎茶6千円・お花5千円